

学校名	江戸川区立小松川小学校	対象学年と人数	4年生
活動名	日本らしい自然の再生		

								
								

目標

生物多様性の保全が言われる昨今、小学校付近のわずかな緑は、造園樹木や園芸草花など人工の緑ばかりです。現代の子供たちの日常生活の中で、生物多様性に富んだ日本らしい自然を体験する場を提供したいと考えました。小学生児童が主体となって、日本の在来植物を再生する活動を行います。

成果

カワラナデシコやキキョウは、秋の七草と言われますが、絶滅の危険が増大している植物です。今の5年生がお世話をしたカワラナデシコとキキョウを4年生が引継ぎ、夏休みに一人一株ずつ持ち帰り、お世話をしています。昨年度に移植したカワラナデシコやキキョウ、オミナエシが正門横のビオトープに花を咲かせ、その後児童が種子を採取しました。児童は調べたことを新聞にまとめ、お互いに見合いました。最後に、東京大学大学院農学生命科学研究科の根本正之先生がまとめの授業をしてくださいました。こまっこが日本の在来植物を再生する活動を行っています。ビオトープコンクール2021では「日本生態系協会賞」を受賞しました。

感想・課題等

小学校児童と地域による、強害外来植物除去による自然再生は、多くの地域で試みられてきました。しかし、毎年草取りを続けても、強害外来植物が容易になくならないのが現状です。また強害外来植物の除去だけでは、在来植物が自然に生えてくることはなかなかありません。そこでこの活動では、地域の緑に日本らしさを感じなくなった都会で、小学校児童が自らの手で在来植物の芽生えから観察と栽培を行い、さらにその苗を「汐入方式」で移植し、昔は東京でも誰もが身近に見たり遊びの対象にしたりした、生物多様性に富む「日本らしい自然」の再生を目指しました。目標とする日本らしい自然とは、東京大学大学院生命科学研究科の根本正之博士が提唱する「人間による自然の『受け入れ』『管理』『改変』の三つがほどよく調和していた空間」です。実際に行った「汐入方式」は、強害外来植物の生えている草地でそれを除去した裸地（ギャップ）に、あらかじめ育てておいた地域苗を植え込む仕方です。長期計画（2～3年）で行えば、児童自ら体験しつつ「日本らしい自然」を取り戻すことができます。実際にこれまでの活動で、東京都の学校の校庭や河川堤防でも、多くの在来植物が見られるようになってきました。必ず関東河川流域から採取した在来植物を移植することで遺伝子攪乱を起こさないようにすることが課題です。移植した在来植物は、年を重ねるにつれ個数を増やし、大きく立派に育っていきます。



校門横に児童が移植し、開花した
カワラナデシコ（秋の七草）



児童が夏季休業中に一人一株持ち帰り、
カワラナデシコのお世話をする



カワラナデシコ・オミナエシ・キキョウを
正門横に移植する



シャベルを使って穴をあけ、
在来植物を移植する児童



カワラナデシコとキキョウの
鞘から種子を採取する



蒸発皿と鉛筆の先を使い
種子のみを丁寧に取り分ける

活動報告（活動写真）



カワラナデシコ（秋の七草）



オミナエシ（秋の七草）



キキョウ（秋の七草）



ノアザミ



ヤブカンゾウ



カワラナデシコのさやから種子をとる

小学生児童が保全活動を行い、正門横で見られるようになった主な植物
ビオトープコンクール2021で、江戸川区立小松川小学校は「日本生態系協会賞」を受賞しました。